

ある火曜日の5限、白山キャンパス3号館3階の各教室からは、英語を話す学生の声が聞こえてくる。「朝起きて最初に飲むのは何？周りの人達に質問して、答えを聞いてください。その理由もですよ」と(英語)ネイティブの教員が声を掛けると、悩みながらもなんとか英語で伝えようと学生は懸命だ。

これは、昨年10月から始まった、英語特別教育科目(SCAT)の1コマ。海外留学やキャリアアップに関わる「TOEFL」高得点を目指す学生対象の、今年2年目を迎えるプログラムで、各キャンパスで行われている。講師は、英語を母国語としない学生に、英語を教える専門家6名。受講生は、週4コマある授業で、様々な講師と触れ合い、英語力向上を目指す。授業内容は、ネイティブとリラックスして会話できることを目標とする「Listening & Speaking」、留学して講義を受ける際、欠かすことのできない読み書きの能力向上を目指す「Reading & Writing」の二種類で、それぞれ週2回の授業がある。もちろん教室内で日本語は一切禁止。このスケジュールを1年間続けければ、プログラム終了までには大きな自信になるはず



「Listening & Speaking」の風景。
講義では次々と話題が出され、テンポよく進む。

「英語しか使わない」授業で、レベルアップを目指す

だ。受講者の一人、二瓶良恵さん(社会福祉学科3年)は「講義の説明も英語と聞いて、少し不安でしたが、先生はいつも易しい表現で丁寧に説明してくれるので、社会学部の私でもつままずかに参加できています。他学部・学科の友人もでき、先生共々会うことが楽しみの一つ」と充実した授業の雰囲気語る。

通常の授業以外にも「留学準備特別英語講座」や、鴨川セミナーハウスで4日間英語漬けの生活を送る「English Camp」など、自主的に参加すれば、さらにも上のレベルを目指すことも可能だ。

昨年から教壇に立つ、講師代表のアンディー先生は「東洋の学生はとても意欲を持って授業に臨んでいると思います。やる気があれば、レベルに関係なくどんどん上達していきますよ。私の授業では、個人的にライフワークとしている、タイのボランティアキャンプ体験を伝えたり、現地の子どもたちと東洋の学生の間で英文レターのやり取りをさせたりと、英語を学ぶ以外にも、いろいろな経験をしてもらいたいと思っています」。

「このプログラムに関するお問い合わせは：白山キャンパス・モンタナ派遣教員共同研究室・語学学習室、朝霞キャンパス・朝霞事務課、川越キャンパス・川越教学課、板倉キャンパス・板倉教学課まで」



鴨川のキャンプでは、レクリエーションの時間ももちろん英語!

おのこののん STUDENT

企業との共同研究・ 屋上緑化実験で サツマイモ25kgを収穫!

工学部環境建設学科 4年

長谷川すばるさん(写真左)

鳥井数広さん(写真右)

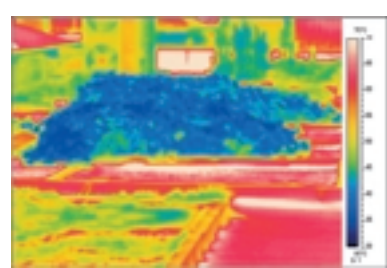


わずか10cmの土壌で育ったユニークな形のサツマイモ。見事な出来栄はサツマイモ資料館館長の井上浩氏(写真左から2人目)からもお墨付き。

サツマイモの実は“おまけ”です

近年、新しく建設される大型建造物の屋上が、豊かな緑で覆われていることにお気づきだろうか。こちらは「屋上緑化」と呼ばれるもので、ここ5年余りで約10倍も増加。景観はもちろん、建築物の断熱性や防音性の向上、ヒートアイランド現象の対策として広がりを見せている。

「環境にやさしい社会の実現」を研究目標に、パラエティに富むフィールドワークを展開する環境建設学科・小瀬博之准教授の研究室でも、「屋上緑化」は大きなテーマのひとつ。2002年から、昭和工業株式会社(川越市)と共同で屋上緑化を実施し、泥炭質の人工土壌、折板屋根、屋上庭園などさまざまなタイプの緑化を試み、それらの評価を行ってきた。今年度、この共同研究に取り組んだのが長谷川さんと鳥井さん。彼らにはこの秋、ちよとした、サブライズが起きた。



サーモグラフィで計測すると、サツマイモの葉部分(青色)と直射日光を浴びる地面(赤色)には約30℃の差が。緑化が周囲の熱の緩和も促す。

今回は、石井成人社長(写真右から2人目)の発案と「川越の名産品を用いるのはユニークだと思つて」(長谷川さん)、「広がる葉は遮熱効果が高いのでは」(鳥井さん)との思いにより、「サツマイモ栽培」が題材に。同社屋上に防根シートを敷き、ブロックで囲んだ広さ2.8㎡、深さ約10cmの「畑」を6月に施工。毎週通つてサツマイモを育て、コンクリートや芝生、葉陰など定点の断熱効果を測定した。途中、暑さや虫の発生に見舞われるも、9月には他の区画にツルが侵入するほど、葉が広がりを覆った。

実験では、わずか10cm足らずの土壌に「実」を期待しておらず、実よりも葉を大切にしていた。ところが研究終了後の10月、掘り起こしてみればサツマイモがなんと25kg。このニュースは新聞報道にまで発展した。

さて、実験で得たデータをもとに、卒論研究をかたち作るのはいくらが本番。「こんなことになるなんて、かなりのプレッシャー」と揃って苦笑するが、熱心に取り組む姿勢は、企業からも高評価を受けた。想定外の収穫は、きっとそんな二人へのエール。サツマイモのような大きな実に向けて、卒業研究のラストスパートだ。